

日本語日本文学（国語学）

◇教員◇

教授：月本雅幸、井島正博

准教授：肥爪周二

助教：田中草大

◇学生◇

学部：11名、修士課程：3名、博士課程：5名

大学院は国文学とともに日本語日本文学専門分野を構成するが
上記大学院学生数はその内の国語学の学生を数えたものである。

人は言語によって生きている。われわれがそれによって生きている
日本語とは、どのようなものであろうか。

日本語はどのようにして現在のようなものになったか。

われわれの文化と言語はどのように関係しているか。

いや、そもそも言語とは何であろうか。言語と人とはどのように
関係しているのだろうか。

（1）「日本語日本文学（国語学）」専修課程とは

国語学というのは、日本語学と呼ばれることもあるように、日本語を一つの言語としてその構造や歴史を研究する学問であって、国文学とは別個の学問である。ただ、日本語の歴史的研究においては、古典文学研究と資料面で共通するところが多く、また一方は言語を通して、一方は文学を通してという違いはあるものの、ともに自国の文化を研究するという大きな共通性をもっているので、大学院では両者が一緒になって「日本語日本文学専門分野」という一つの単位を形成している。

しかし、学問としての目的も、方法も、それを達成するために身に付けるべき訓練の内容も、国語学（日本語学）と国文学とでは異なるので、学部の専修課程としては、昭和 50 年以來ずっと二つの専修課程として独立して運営してきた。独立した二つの専修課程であるということは、国語学

と国文学とが別々に定員を持って進学振り分けを行い、別個の取得要求単位を指定し、それぞれの独立した研究室を持つということまで含めて、今後とも変わるものではない。ただ、教員組織としては、「国語学」「国文学」の二つの学部専修課程が名目上「日本語日本文学」という一つの共通の看板を掲げることになっているので、専修課程名はカッコ書きとなっている。

（２）日本語学と国語学とは同じか。それはどういう学問か。

日本語学と呼んでも国語学と呼んでも同じものであり、要するに日本語の構造や歴史を研究する学問である。日本史学が国史学と呼ばれることもあるように、日本語の学は伝統的に国語学と呼ばれて来たが、最近日本語学と呼ばれることが多くなり、全国学会の名称も、国語学会から日本語学会に変わった。専修課程名としては、共通看板に新しいほうの呼び名を用い、カッコ書きに伝統的な呼び名を使っているまでのことである。

従って、言うまでもないことだが、「国語学（日本語学）」と高等学校までの「国語」とは全く違う。「国語学（日本語学）」は日本語を一つの言語としてその構造や歴史をいろいろな角度、観点から研究する学問である。

では、日本語学（国語学）と言語学とはどういう関係にあるのか。日本語学（国語学）は日本語という個別言語を研究するものだが言語学は言語一般を研究するものであると考えられがちである。が、これは間違いである。そもそも「言語一般」というようなものがこの世にあるわけではなく、研究対象として存在するのは〇〇語という個別言語のみであって、その個別言語のあり方を究明し、場合によってはそれを通して言語一般のあり方を問うていくのが、*linguistics* である。すなわち日本語学（国語学）、英語学、中国語学などをはじめ〇〇語学の総称としての呼び名が *linguistics*、言語学なのであって、個別言語のあり方を研究する学問であるという限りでは、日本語学（国語学）もいわゆる言語学の一つである。

総称としての本来の意味の言語学から日本語、英語、仏語、独語、中国語、露語など、深い文化的伝統を持ったメジャーな言語の言語学がそれぞれに独立して「〇〇語学」として学問、教育上の単位となっているのが日本の大学の大かたの傾向であり、それらを引き去ったあとの諸言語を含めて全ての言語を対象にするというスタンスをとっているのが、いわゆる狭義の言語学である。日本語学は、たとえば言えば、総合電器店ではなく、日本語という対象言語に特化した専門店である。日本語に関する品揃えと

商品知識はどの店よりも充実しているはずである。

さまざまな言語の中でも、われわれがそれによって生き、それによってわれわれの文化を形成している、日本語という言語を研究することの必要と重要性は特に大きく、そのために国語学という学問分野が早くから独立したのであった。百二十年前に上田万年教授が東京大学に（というより、日本に）「国語学」という学問分野を設定した当初から、世界の諸言語の中の一つとしての日本語を研究するという姿勢と、日本社会の近代化と日本語のあり方との関係を強く意識するという姿勢とは、われわれの「国語学」の中に濃厚に流れているものであった。また、およそ半世紀前にわが研究室の教授であった時枝誠記氏は「国語学とはわれわれの母語である日本語を通して言語とは何かを問う学問である」と規定された。

いわゆる言語学の日本語研究が現代語中心であるのに対して国語学は日本語の歴史的研究が中心であるというイメージを持つ人もあるが、これも誤りである。日本語学会の研究発表の約半数が現代語に関するものであり、学会誌「日本語の研究」の掲載論文もおよそ半数が現代語に関するものである。現代語に関する実証的、理論的研究と国語史に関する研究との両方に等しく目を向けているのが国語学である。

国語学の日本語研究は古い時代の資料をめぐる実証的研究が中心で、生きたことばを対象にする研究や理論的な研究は少ない、と思いこんでいる人がいる。これも大まちがいである。たしかに、日本語の歴史的研究のためには文献資料しかないから、その実証的調査が基盤となるのは当然のことであるが、現代語の研究においては文字資料も音声資料も含めた言語行動の全般が研究の対象となる。また現代語研究では、データの分析による実証的記述のほかに、日本語の文法構造や意味と文法の間を正面から問う理論的研究の比重が大きい。

われわれが国語学の日本語研究に魅力を感じる点は、もう一つある。それは文法の理論的研究の深さである。あまりよく知られていない言語における文法の研究は、当然ながら文法的事実の記述が中心であるが、日本語、英語など研究の歴史が深い言語においては、文法研究とは文法的事実の理論的解釈とそのための理論の構築が中心であり、文法事実の側の研究も、理論的解釈を有効に組み立てるための必要から新たな観点によって事実を調べ直すという色合いが濃い。ただ事実を事実として記述するだけでなく、それが語り出してくる理論的な意味を掬いあげのおもしろさ、既存の

枠組みを適用するだけでなく日本語の事実に立脚して理論を作っていくおもしろさが、国語学の魅力の一つである。

国語学（日本語学）は、資料も研究の蓄積も大きく、背後に深い文化を持つメジャーな言語の学として、このようにいくつもの魅力を持つ学問である。本学の国語学専修課程の特徴は事実を決しておろそかにしないという態度であり、その裏づけとして、貴重な江戸以前の資料を大量に保有し、現在も新たな資料の拡充につとめている。

（3）日本語学（国語学）の領域

日本語研究への動機はさまざまにあり得る。われわれが感覚的にも最も深く把握し得る母語、日本語の研究を通して言語とは何かを問うという動機もあり、古い時代の日本語はどのようなものであったか、現在の日本語はどのような経過をたどって成立したかを究明しようという動機もある。また、古典文学への語学的アプローチを通して日本の文化、美意識のあり方を明らかにしたいという動機もある。日本語の文法構造やその歴史的変遷の究明によって、またわれわれの言語行動の分析を通して、日本人の思考様式のあり方を探るといった実践的な動機に基づく日本語研究や対照研究もある。それらのすべてが日本語学（国語学）である。要するに、日本語を対象とする限り、どのような目的、関心を持つ研究も、どのような方法による研究も、すべて日本語学（国語学）なのであって、その意味ではきわめて範囲の広い、自由な学問である。

日本語学（国語学）の分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語用論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の（広い意味での）使用をめぐる、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的、空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育法の研究などもある。学生諸君は、このような広がりの中から、各自の興味と関心に従って自由に研究テーマを設定することができる。

（４）各教員の専門分野と授業内容

授業は講義と演習とに分かれており、講義はおおむね、各時代の日本語の実態やそれを知るための資料について解説するものと、文法や意味をめぐってその理論的研究のあり方を解説、検討するものがある。それらが相互に深い関係を持っていることは言うまでもない。演習は、各時代の文献を資料とし、実地について、言語事実を正確に把握する方法の習得を目指すものと、専門の研究論文の読解、検討を通して言語研究の視点や理論の理解、習得を目指すものがある。

国語学専修課程には現在３名の専任教員がおり、その専門分野と近年の授業内容は、ほぼ次のとおりである。

月本雅幸教授は、主に訓点語（漢文に記入された日本語）を通して平安時代の国語の諸相を研究している。講義は、平安から鎌倉にかけての訓点資料の実態と言語体系に関するものが中心である。

井島正博教授は、語用論を含む文法論が専門である。授業は、現代語の文法や談話分析をめぐって、欧米の言語理論を視野に入れた講義が行われる。

肥爪周二准教授は、悉曇学（仏教におけるインド語学およびその影響のもとに発生した日本語音韻学）を中心とする日本音韻学史、悉曇資料・漢字音資料による日本語音韻史の研究を行っている。

このほかにも、日本語学（国語学）の多様な分野をカバーするために、毎年、非常勤講師を招いて、講義を願っている。

最近の非常勤講師の講義は、次のとおりである。

２０１５年度

沖森卓也講師「上代語の諸問題」

森山卓郎講師「コミュニケーションと日本語文法」

小林隆講師「方言研究の諸問題」

２０１６年度

沖森卓也講師「上代語の諸問題」

笹原宏之講師「漢字・表記研究」

沼田善子講師「事態結合表現の研究」

この他に本専修課程の紹介により、次の科目が「多分野講義」として英語を用いて開講される。

2015年度、2016年度

Timothy J. Vance 講師「Topics in Japanese Phonology」

（5）当専修課程における学習活動

文学部に進学してから卒業までに必要な単位は76単位であるが、当専修課程においては、そのうち国語学概論、国語学特殊講義、国語学演習、言語学概論、国文学特殊講義など計32単位と卒業論文または特別演習12単位、合計44単位が必修であり、残り32単位は、どの学部どの授業から選択してもよい。国語学の特殊講義や演習にしても、多数開講されている中から自由に選ぶことができる。学部学生時代は、狭い専門に閉じこもらず、できるだけ幅広く、多様な学問に触れることが望ましい。

学生諸君は、講義や演習を通じて様々な問題に出会いつつ、必要に応じて教員に相談しながら、おおむね4年生のはじめまでに卒業論文のテーマを各自で決めることになる。5月には卒論の題目発表会、7月には研究計画発表会、さらに10月には中間発表会があり、ここでもらったアドバイスを踏まえて、1月の提出まで論文作成に奮闘することになるが、この経験は文学部生活最大の思い出となるであろう。せっかく文学部を選んだのだから、たとえ未熟でも稚拙でも、自分の考えたことを自分の言葉でまとめてみたいものである（なお近年では卒業論文を書かず、特別演習を履修して卒業する学生も少なくない。これは日本語に関するデータ採取、研究文献精読、古い文献の翻刻などを2科目行うものである）。遠く、なじみのない対象ならいざ知らず、日本語というような身近な対象についてなら、科学的な手続きを経た上で、確かな実感をもって自分の言葉で自分の考えを組み立てることができるはずである。自分が無意識に使っていることばの来し方と現状に光を当て、自分自身を理性的分析の対象とする。日本語学はそういうことができる唯一の言語学なのである。

卒業後の進路としては、マスコミ・出版・広告代理店・コンピューターソフト会社・メーカー・旅行業など一般企業に就職する者が多いが、大学院に進学して研究者を目指す者、官界・教育界に入る者、言語療法士の資格を取る者などもいる。社会に出る者も将来研究を続ける者も、学部学生の2年間、われわれがそれによって生きている自らの言語というものと向かい合っただけで思案を深めることは、何にも増して有意義な経験となるであろう。